あとがきに代えて——白石一文「神秘」を語る

——がんをテーマにしたきっかけは？

白石　がんは、長年、現代人の三大死因のひとつで、あらゆる国の医学界の最も優秀な頭脳ががん克服のために日々研鑽を重ねていますが、いまだに切る（手術）、焼く（放射線）、毒を使う（抗がん剤）の三つが主な治療法で、完璧な解決策は見いだせていません。これは現代における人間共通のテーマとしてはかなり珍しい現象で、非常に科学的であり哲学的なテーマであると思います。がんは人類にとって依然として最大の障壁であり、大きな謎なのです。

何年かに一度は特効薬や画期的な治療法が見つかったというニュースが流れ、しかしそのうち尻すぼみになってしまいます。ここ数十年、さまざまな治療法が脚光を浴びては消えていきました。そんななかでも有効な治療手段は年々増えていて、生存率も上がっているといいますが、僕はちょっと懐疑的なんです。少なくとも、我々が、

がんを告知されたときに激しく絶望するという現実はほとんど変わっていないでしょう。

三十代からがんの関連書籍を読み続けています。父、祖父、叔父たちもほとんどががんで亡くなり、いずれ自分も罹ったとき、安心して大丈夫と思えるようになりたくて興味関心を持ち続けてきました。家族をがんで亡くした人は僕の周りでも少なくありませんが、治療経過、手術や薬について尋ねても、詳細に答えられる人はほとんどいません。医者に任せるとしても、まずは自分でどんな治療を選ぶか決めることが大切だと思います。

とはいえ、どれほど勉強しても、なかなか安心とまではいきません。それだけ大変な病気なんです。でも、ときには「治った」という話も聞こえてきます。奇跡的に治ったという人の話をたくさん読むうちに、がんは一括りにはできないけれど、ちょっと考え方を広げると治る可能性があるのかもしれないと思うようになりました。

——奇跡的治癒はあると？

白石　末期膵臓がんの人物を主人公にして小説を書くからには、治る可能性がないと思ったままでは書けませんよ。小説で引用した『奇跡的治癒とはなにか』を読んでも

らってもいいですが、どんなに厳しいステージだと言われても治る可能性はあります。同書のみならず、そういった例は世界中で報告されている。がんについては、なぜ治らなかったかではなくて、どうしてこんな深刻な状態のがんが治ってしまったのか、を深く追究するべきでしょう。しかし、いまもってそうした現象について誰もまともに研究していないのが現状です。でも、何百万人中ごく僅かかもしれませんが、何か特別なことが起こっているのは確実です。それが一体何かを考える意味はあると思いませんか？

とにかく絶望しないことが大事です。絶望から離脱することが非常に難しい状況に追い込まれるのですが、治った人には、治った人なりの特徴、重なっている部分があるようです。僕が思うに、がんを治せた人は、がんを治すことに熱中できた人で、なぜ自分ががんになったかを突き止めた人です。「誰もが罹る病気だし、自分もたまたまなってしまった。運が悪かったのだ」という考えを捨てるのが第一歩でしょう。そうやって自らが原因を追わなければ、がんは他の誰も原因を見つけられない特殊な病気です。むろん医師には患者ひとりひとりのがんの原因が分かるはずもありません。そして、原因が分からなければ本当の意味での治療手段も見つかるわけがないのです。

たとえば、ストレスが原因だと思うなら、それが、一体どういうストレスなのか、

そのストレスはいつから始まり、いまも続いているのか、それとも過去に遡って解きほぐさざるを得ないものなのか——といったことを深く考えてみた方がいい。治療しながらでも考えられます。がんはそういう時間を与えてくれる病気です。

——主人公菊池は、がんの原因は離婚だと考えました。

白石　彼の場合、妻であった藍子との関係は非常に重いものでしたから、親友と不倫して彼女が出て行ったことは許しがたかった。確かにその怒りは容易には消化できなかったに違いない。とある研究によれば、配偶者の死は最も深刻なストレスの誘因であり、免疫力を長期にわたって引き下げるものですが、離婚はそれ以上のダメージを与えることがあるといいます。菊池の場合はそのケースだったのでしょう。彼は離婚から五年後に余命一年の膵臓がんと宣告されてしまいます。

しかし、彼は治療は放棄して、まったく別の行動に打って出ます。過去に不思議な電話をかけてきて「超能力で病を治せる」と語った女性を捜し出そうとするのです。そして、ようやくその女性が見つかった雨の夜、彼女の部屋に連れて行かれると、布団の中で彼女から「女になりなさい」と求められる。

がんの奇跡的治癒を小説的にどう表現するか？　この場面を思いついたとき、これ

で書けると思いました。がんを治すとはそういうことなんです。つまり、今までの自分とはまったく違うものになることが秘訣です。すごく難しいことですが、それこそが、がんを治した人たちに共通する一番大きなことです。

――生きながら、生まれ変わるということですか。

白石　AががんになったらBにならないといけないんです。A→Cancer（がん）→B、つまり今までの自分とは違う自分になるということ。Aに戻ってしまってはだめなんですね。そして、AとBは決定的に違うものでありながら同等の価値がある。そこに優劣はありません。男が女になり、女が男になるというのはそういう意味で非常に分かりやすいたとえでもある。男女はまったく違っているけれど、まったく同じ価値を有した人間同士です。

悟りを開け、立派になれと言っているのではありません。怠け者が真面目になる、成績の悪い人が、勉強して頭が良くなる、そういうことではない。がんが治った人は一様に「がんは人生を変えてくれるきっかけになる」と言います。

――菊池も、彼女によって違う自分に変わるよう導かれていきます。

白石　彼女に「女」にしてもらうんですね。劇的な出会い、特殊な関係性だからこそできたことではありますが……。セックスひとつとっても人間はなかなか型通りのものから抜け出せないじゃないですか。だからこそ、こういうセックスができたら本当に変われるんじゃないかと希望を込めて書きました。

でも実は不思議なことって結構あるんですよ。小説の中で菊池が受けた電話は、昔、僕自身が体験したことです。当時、僕は週刊文春の記者で、ある日、ほんとうにそんな電話が掛かってきたのです。相手の女性が話したことはほぼ小説に書いた通りですし、手書きのメモもその場で作りました。仕事柄、ヘンなタレコミをしてくる人とはしょっちゅう話していたので、話の内容の信憑性を見極める力はすでに身についていました。彼女の場合、デタラメを言っている人とは電話の雰囲気がまるで違っていましたから、話の途中で絶対本当だと確信しました。一番びっくりしたのは、超能力で自分と他人のおっぱいを大きくしたという件です。これは暗示をかけたからといってできることではありません。

そのときの手書きのメモは、菊池がそうであったように僕もずっと大事に保管していました。そして、この作品を書くときに引っ張り出してきて、ほぼ全文、そのまま使ったのです。さらに不思議なのは、当時僕は小説家でも何でもなかったわけですが、

そのメモを作った時点で、これは必ず小説にしよう、いや、いつかきっと小説になるだろうと強く感じたことです。それから四半世紀が経ち、僕は小説家になり、毎日新聞から連載の話が来たときにこれを書こうと思ったんです。

――普段からよく神秘的な出来事に遭遇しますか。

白石　人より多いのかも知れません。この電話の女性以外にも超人的な力をもつ人を複数知っています。でも実は誰もが神秘的な体験をしているのに忘れているだけなんですよ。人間の頭は、不思議なこと、理解できないことや理解しない方が便利なことは忘れるようにできているんです。それはまっとうな常識人として社会生活を営んでいくために、あまりにも規格外のことはとりあえず忘れようというバランサーが働くためです。そうしないと日常に支障をきたしてしまいますからね。

とある友人の話ですが、彼の母親の葬儀の日、ご遺体のそばで子どもたちが何かしているようなので、何をしているのと聞くと、おばあちゃんと話していたと言うのだそうです。当然亡くなった方が口をきくことはないので、幼い子どもたちには何か別のものが見えていたのでしょう。こういう話は世の中に山のようにあります。そして、この子たちはそのことを覚えているかというと多分忘れてしまう。常識的に生きてい

くために平衡を取り戻すのです。

性別の話でいえば、男と女の間にあらゆる性自認があるのは本来自然なことです。忘れているだけで、幼い頃、「スカートの方がいいな」と思っていた男の子や「男の子になりたいな」と思っていた女の子はわりと多くて、口にはしなくてもそれぞれ自由に感じていたはずです。社会的制約や肉体の成長に合わせて、男／女を選択する方が制度の中で生きていくのに都合がいいのでそうしますが、完全に割り切れているわけではない。なかには男女の概念を持たない人、性別を重要視しない人がいるのは、ちっともおかしなことではありません。

がんに罹る人が少ないコミュニティの特徴のひとつとして、そのコミュニティ全体がセックスにおおらかであるというのがあります。これは、当然男女間のことだけを言っているのではないでしょう。

がんという病気が厳しいのは、このバランスを戻さなかった状態とリンクしている場合が多いことです。そっちにすこし気持ちを傾けていかないと、なかなか治しにくい。

——バランスを戻さないままの方が、がんにはいいということですか。

白石　奇跡を信じる余地を持つということです。別の自分になるのに、そういう忘れ

てしまった神秘的な出来事を思い出してみることも必要かもしれません。

ある程度の制約は普通に生きていく場合には有益ですが、病気を治す時期には障害になる場合もある。がんになって死というテーマにぶちあたった際は、それまで自分がバランサーとして使っていたものだけでは太刀打ちできません。

だから、それを捨てることはできないとしても、ちょっと傾けてみる。すると、自分が傾いているから、いろんなことを違った風景として捉えることができるようになる。特に重要なのは自分という人間の自己イメージです。「自分はこういう人間なんだ」という思い込みを見直してみる。すると、もう一人の自分が自身のなかにずっと住みついていて、何十年ものあいだ何か肝腎なことを求め続けているのに気づいたりする。

そして、いま自分のなかにあるがんを癒やしてくれるキーパーソンは、そのもう一人の自分だったりするわけです。自分を変えると言っても、まずはそういうことからでいいと思います。誰もがバランサーは真っすぐに持つものと思い込んでいるし、一度傾けたらもう元に戻せないと思っていますが、そんなことはない。

――変わり始めた菊池は、過去の偶然の出会いが必然だったと気付き始めます。巡り

巡って、最後に新しい自分で妻と出会い直すことができたのでは。

白石　普段は、人との出会いをそこまで追求しないですよね。自分との間にどういうルーツがあるのか。どういう経緯で今の関係に至ったのか——記憶がどんどん失われていくこともあって、僕たちはそんなことはあまり深く考えません。「たまたま」とか「何となく」とか、そういう言葉でやり過ごします。「あのときは運命の人だと思ったのよねえ」とぼやくことはしても、一体どんな理由でそう思ったのかは忘れているし、付き合いが長くなるうちに相手との一つ一つの体験に運命の要素を確認するなんてしなくなる。しかし、よくよく意識してみれば、人間同士の繋がりには大きな意味があるんです。菊池の場合、一度切れた藍子との縁を元の形に修復するのは難しい。そして、たとえそれが理由でがんになったとしても、それは必然だったことになる。しかし、だからこそ、その軌跡を逆回しのようにたどることでがんを乗り越えることができたのです。そうした過程で、単なるヒーラーとして存在していたはずの山下やよいと自分との隠れていた繋がりがにわかに浮かび上がってくる。

　そういう点では、彼は藍子に去られたときに彼女との縁が切れたように錯覚していたけれど、実は、まだ二人の関係は水面下で脈々と繋がっていたんです。そして、彼は、藍子との再会へと導かれるうちにそのことを思い知ることになる。人間同士の深

い繋がりというのは、それくらい根深いものだということですね。

――いま死やがんに対してどんなふうに感じていますか。

白石　人生とはいろいろなプロセスを経るもので、どこのプロセスで終わっても間違いではない。越せるプロセスと越せないプロセスがあり、多くのものは越すことができますが、それはその時の運もあるし、自分が越したいと思うかどうかにも関わっています。

人生の最後のプロセスは死ですが、死に関しては、僕たちはそれまでの人生上のさまざまな試練とは異なって「越えたい」と思わなくていいのかもしれません。もうこのへんでいいかなと思えるところまで生きられればＯＫ、ということです。

臨死体験や脳死について詳しく取材、執筆した立花隆さんが亡くなる前に、若い頃は死ぬのが怖かったが、歳をとってきて怖くなくなってきたと何かに書いていて、こういう作家の肉声は実にありがたいものだなと思いました。僕も六十五歳になるので、昔よりは死が怖くなくなってきているんです。死ぬ瞬間まで畳をかきむしるくらい悔しいかと思ったらそうでもなくなってきた。不思議です。

一昨年、膵臓がんで亡くなった山本文緒さんが最期まで書いていた日記『無人島の

ふたり』（新潮社）にも感銘を受けました。山本さんはいたずらに悲観的になるわけでもなく、ちゃんと死ねるかなということを最期の最期までこころのなかで突き詰め、読者に必要と思われる言葉だけを残している。末期がんになってもここまでできるんだと頭が下がる思いでした。

がんになっても意識はクリアだし、自分が死に向かっていくある程度の時間を持つことができます。肉体的な苦痛は怖いですが、今はがんはそんなに悪い病気じゃないと感じています。

——もし、がんになったら菊池のように治す自信はありますか。

白石　まだまだ自信なんてありません。ただ、昔よりはちょっとあるような気もしますね。今回、文庫化にあたっておよそ十年ぶりに『神秘』を読み直してみて、この時点でここまで書けているのであれば、現在の自分はもっと先のことまで摑めているのではないかと希望を持つことができました。もちろん、この小説にがんを癒やすための決定的な方法は記されていませんが、医学的に見て役に立つ部分も含めて、がんを宣告されたならば、一度は読んで損はないと思います。